式谷瑠璃シリーズ（第４回）

星月夜

刑部しきみ＋TEAM JNS
イラスト　コシヌケ1040

正月も三が日を過ぎた日に、鋼兄(はがね)さんがやつて來た。
本來なら私と曾祖父が東京に行く筈だつたのだが、年末に曾祖父の具合が惡くなつて、一緒に上京出來なくなつてしまつたのだ。

私の部屋は一番舊い平屋の、南側の和室である。無駄に大きなこの家は所謂「お下がり」で、現在まるごと私のものなのだが、基本的にはこの一部屋しか使つてゐない。他の部屋は、季節外れの服だの扇風機だのが置いてある程度だ。家といふのは解體するよりも、建てる方が樂なのだ。そして、維持するのは結構難儀なのである。

年末に頑張つて張り替へた障子が白く光つて眩しい。布團のすぐ側で充電してある携帶で時間を確認するのが、私が起きて最初にやる事である。

「十時半か」

懷かしいアニメの一擧放送をやつてゐたものだから、つい全部觀て夜更かししてしまつたのがいけなかつた。

「……ねむ……寒い……」

大きく欠伸をして、足の指を開いたり丸めたりして、なんとかもう一度布團の中にくるまりたくなる衝動を抑へる。怠惰はいけない。癖になつてしまふ。

式谷家の敷地は廣い。敷地のものを全部撤去すれば大きめのマンションは餘裕で建てられる。駐車場の併設は……流石に無理だらう。舊くからの住宅地なので、どの家も皆舊い。うちも例外ではないが、敷地の廣さが幸ひしてなんとか新しい家を建てられたといふ所である。

新宅と繫げた渡り廊下は寒いので、この時期、部屋からは厚手の部屋著とコートを著込んで出なければならない。眠氣覺ましにシャワーを浴びる前に黑田さんにメールでお願ひして珈琲を二人分淹れて貰ひ、書齋へ持つて行く事にした。

式谷家の書齋は新宅にあり、改裝したので一番新しくて、しかも廣い。洋間の三面にびつしりと本棚が作られてゐて、曾祖父は家にゐる時の大半を此處で過ごす。

「おはやうございます。曾祖父様(ひいおぢいさま)、お加減は如何ですか」

書齋では、灰色のハイネックセーター姿の曾祖父が何やらノートパソコンに向かつて文章を書いてゐた。また執筆でもしてゐるのだらうか。机の上には木で出來た書見臺と、分厚い本が山の樣に積んである。この机周邊の掃除は誰にもさせないの

で、此處だけ隨分散らかつてゐる。
「おお、瑠璃子。今日は幾分調子が良いぞ。鋼もさつき此處に來てゐたんだが、家を出てしまつての」
　私は曾祖父の机のサイドテーブルに珈琲のカップを置き、手近なソファに腰掛けた。
「鋼兄さんがですか」
「ほうよ。朝から越智さんと連れ立つて、自轉車に乘つて何處かに出かけたぞ。い、イングレス、なる場所取りゲームがやりたいんだと。今調べたんぢやが、都會の散歩には良ささうぢやの」
「田舍なんだから大したポータルも無いでせうに、良く行きますね」
「昔ッからそこら邊をウロウロするのが好きぢやけえの、鋼は。携帶もよう持たんのにから」
　おそらく越智さんがイングレスをやらされてゐるのだらう。乘り氣でないのであれば氣の毒であるが、越智さんはさういつた不滿を漏らす事は一度もない。兄と朝も晝も夜もずつと一緒だと云ふのに、徹底した仕事人である。

「瑠璃子は今日は暇なんか」
「まあ、今は正月休みなので、仕事はありませんね」
「ぢやあ、世界景麗社に頼んでゐた品を取りに行つてくれんかいの。後で小遣ひは出す」
　私は運んできた珈琲に口をつけた。黑田さんは珈琲を淹れるのが上手なので、うちでは皆珈琲を飲む。
「丁度お晝時で、黑田さんも忙しいですからね。良いですよ、これ飲んだら行きます」
「すまんね」
「もうあの變な本屋さん開いてるんですか」
「藤重さんは働き者ぢやけえの、三日から開いちよる」
　曾祖父はさう云つて、ず、と珈琲を啜つた。
　世界景麗社といふのは、明治時代の末期から營まれてゐる小さな古本屋である。その餘りに舊い佇まひと、その店舗から溢れ出るやうな變態的な藏書數で地元の人――ではなく、縣外や海外の好事家の人々に親しまれてゐる。漫畫は勿論、小說なども一切扱はず、技術書や美術書、謎の同人誌や鄕土誌などを專門としてゐる。曾祖父の著作やエッセイは此處からいくつか出版されてゐる。困つたことに、エッセイでは私は勿論、家族も全員搖りかごから墓場まで逐一ネタにされてをり、非常に恥づかしい。

「何の本ですか」
「なに、いつもの同人誌と、宇宙人關聯の本を取り寄せて貰つたのがあつてな」
　いつもの同人誌といふのは、店主の藤重さんが作つてゐる國內國外の樣々なＳＦの批評本である。お盆と年末は店を閉めて、

東京へ自作の本を賣りに行つてゐるといふ。
「ああ、今回は曾祖父様も寄稿してゐたんですつてね」
「ほんの數ページぢや、ま、數にはならんよ」
「さういふものですか」
出版の世界はちつとも判らないし、曾祖父がやつてゐる仕事も最近その風景だけは見るやうになつたが、さつぱり判らない。とにかく曾祖父は働き者なのである。多少體を惡くはしてゐるものの、パソコンに向かつて仕事をする樣は現役そのものだ。

「さういへば宇宙興産の創業祭は行くんか？」
「なんでまた」
「この前行つたんぢやろ、宇宙興産。ええノォ生ブロントメク」
羨ましさうに云ふ樣は、まるで子供のやうである。
「曾祖父樣も行けばいいぢやないですか。多分創業祭なら置いてあるブロントメクに乘れますよ」
「ああいふのはイベント以外で見て、本當に空を飛ぶ時に乘るからええんぢや。ぜひ乘りたい、超宇宙行きたい」
「私だつて別に乘つた訣ではないのですが」
超間近で見た。正直ぶつかるかと思つた。
「創業祭――宇宙まつりに行つたらええ。昔からあそこは野外ライブやらのイベントや變つた出店も多いからの。儂も體が惡くなければ行くんぢやがの」

「といふか、曾祖父樣が行きたいんですね」
「おう」
やつぱり。
「まあ、仕事の都合もあるぢやらうけ、行けたらでええよ。鋼にも聲をかけてはあるんぢやが、いつまでこつちにをるか判らんからの」
「え、そんなに長く東京を離れるんですか」
「メンヘラン星人がまだ宇宙市方面に居るらしうての、休み明けから暫く宇宙市に滯在するらしい。今回は帶刀も許可されたとかで、神經使ひさうな難儀な話ぢやの」
「帶刀許可とは穩やかぢやないですね……」
實は、鋼兄さんは星月夜と云ふ特殊な刀を持つてゐる。メンヘラン星の碎け散つたかけらから錬成された、なまくらである。多分、白菜も切れない。ただ、その材質からか、メンヘラン星人と共鳴する性質を持つやうで、その共鳴が今回の捜査に必要になつたのだらう。
「ま、うまくやるぢやろ。儂の曾孫ぢやけ」
「お祭りの事、考へてみますね。もしかしたら職場の人も興味あるかも」
「おう、ほうかほうか、まあ、人數は多い方が樂しからうて」
かうして、またもや宇宙市へ行くフラグが立つたのである。

因みに、この後世界景麗社に赴いたら、もの凄い册數の本を

渡され、少し離れた駐車場に行くまでに、指が袋の紐に食ひ込んですつかり紫色になつたのは、また、別の話である。

――――

仕事始めの日。

元喫茶店だつた事務所はいつみても外觀も內裝もかはいい。かはいいが、盆地にあるので夏暑く冬寒いのがネックである。

困つた事に敷地內には駐車場が一臺分しか無いので、私もルチルも餘程何かある時以外は公共交通機關で通勤してゐる。

事務所は大掃除で（主にルチルの）餘計な私物をかなり引き拂つたので、隨分さつぱりとしてゐるが、早速眞新しいデスクトップパソコンの箱と詰め物らしきものが部屋の隅に亂雜に置いてある。特に用事もないので、先に來てゐた屬（さつか）さんが色々セットアップしてゐるのを、後ろから眺めた。

「これ、新しいパソコンですか」

「ルチルの部屋のやつ、年末に一臺マザーボードがイカれての。ま、そろそろ買ひ替へ時かのと思つて休みの間に注文しておいた」

「新しいパソコンと聞いて」

ルチルがガランッとドアベルの音をさせて出勤してきた。

「おはよ、相變はらずこの事務所は外に會話が筒抜けヂャの」

「あけましておめでたう、ルチル」

「あけおめ！　外寒かつたーエアコン萬歲ー文明の利器素晴らしいー」

ルチルは今日も巨大な荷物を持つてゐる。

「三人揃つたし、さて、仕事するかのーあんまり氣が進まんのー寢てたいのー」

「ダメッす、パソコンのセットアップはウチに任せて、サッカンは十一時に驛ビルで商工會の會議ッしよ」

「さうだつたー、やだなーをぢさん達頭固いんだもん」

屬さんが嫌嫌といつた感じでスーツの上にミリタリーコートを羽織る。

「ちよつと行つてくるー」

「お氣をつけて」

「行つてらー」

――――

屬さんが歸つて來てから、私は宇宙興產のお祭りについて話をした。

「宇宙興產のお祭り？　聞いた事はあるけど、行つたことはないのォ」

近所のホットスナック販賣の店で買つてきたらしい燒きそばを豪快に食べながら、屬さんは顏を上げた。

「曾祖父がどうしても行きたいらしくて、代はりに行つて來い

と」
「ほえー」
ルチルは「お正月に食べ過ぎた」と云つて、お手製の謎のスムージーを飲んでゐる。そんなので腹が膨れるのだらうか？
「うーん、チケット大人一人二千圓か。なんとかして割引出來んかの」
大きく「宇宙まつり」と書かれたポップなサイトを見ながら屬さんが呟いた。
「西野さんに打診してみれば良いんぢやないッスか」
「それだー、後で電話して賴んでみよ。ルチル頭いいな！」
「へへへ……ところで、サッカン、宇宙まつりに行くにあたつて、お給料の前借りをお願ひしても良いッスか？」
「あー、ルチルお前、また年末年始で金を使ひ込んだな」
「ブラッディーポプリの歲末バーゲンと、ダスティ・リンボとバイナリィティアラ初賣りの誘惑に勝てなかつたんス」
「著道樂ぢやの」
「今日のお洋服もブラッディーポプリの新作ッス」
ルチルはブラッディーポプリのキャラクターである「右の眼窩にショッキングピンクの薔薇の花が咲いた猫」がプリントされた黑いハイネックの服——左目の部分はボタンか何かの半球で、金色の中に浮かぶ黑い瞳孔が、リアルな猫の目によく似てゐる。いつもの白衣を引つ掛けてゐると、そこまで目立つものではないが、なんとなく生地が高さうだ。さういへば、赤と黑のチェックの膝上スカートも見た事がないものを著てゐる氣がする。
「お前の金遣ひの荒さはどうも治らんの」
「うーん、服飾費以外はあんまり使つてないし、著なくなつた服はこまめにオークションで賣つてるのに、何故かクローゼットがパンパンでいけないッス」
「その服飾費が問題なんぢゃないんか」
「カード拂ひなんで口座に現金を殘しておきたいんスよ」
「わかつたわかつた、その代はり一萬圓以內だぞ」
「やつた！　サッカン大好き！　でも結婚はしない！」
「なんぢゃそりやあ。あ、式谷ちやんもちやんと奢るからの、遠慮せんでええよ」
「ありがたうございます」
これは、役得なのだらうか？
結局、その日に屬さんが西野さんに交渉したら、後日、社內優待割引券附きチケットを事務所に送つてくれた。
持つべきものは人脈である。
———
宇宙まつり當日。

暖かくはないが、良く晴れてゐる。風もあまり吹いてゐない。

公共交通機關での來場をすると、宇宙驛から無料のシャトルバスが出てゐると書いてあつたので、電車で移動することにした。

いつも見慣れた電車は、本日二輛編成である。少し早い時間だからか、車内には殆ど人が居ない。

今日の屬さんは、珍しく大きめのバッグを持つてゐる。黒いバッグに、全身が白骨化した骸骨が排水口に頭を向けて寢そべつて居る樣子が描かれてゐる。なんでも繪が得意な友人に描いて貰つたらしい。

著てゐるコートはかなりタイトめなシルエットで、スタッズが隨所についてゐる。大きなフードやポケットにはメッシュ素材が使はれてゐる。どこで見つけてくるのだらう……あまり見た事のないデザインだ。奇拔といふより、良くわからないが、サイバー系つぽい。履いてゐるズボンも、最初はカーゴパンツだと思つたのだが、それにしては妙に裾が廣がつてゐる。總合すると、一見おとなしめだけれども、よーく見るとなんだか良くわからないといつた風だ。靴もなんだか黑地にオーロラつぽい光澤が伺へる。

ルチルは今日はぱつつん前髪のフルウィッグを被つてゐる樣で、胸まであるピンクブラウンの髪がたつぷりとカールを卷いてゐる。襟元に毛足の長いファーがたつぷりとついた薄手の黑のカーディガンの中に、マキシ丈の宇宙柄ワンピースを著てゐる。ジッパーでなく紐できつちりと編み上げられた厚底ブーツはウエッジヒールで、長い歩行にも耐へられさうである。

「ルチル、その恰好寒くない？」

「ヤミクロのサーモスペース、新しい奴めつちやスペック高いッスよ。薄手のインナーは冬のオシャレの必需品ッス。あとウチそんなに著こむの好きぢやなくつて。ウィッグもぬくいし」

「へえー」

「瑠璃さん、今日は結構タイトな上著ッスね。でもつて襟元のボリュームがあるの、恰好良くていいなァ」

「うん、この前ちよつと通販で買つて」

「全體的にくしゆつとしてるのも可愛いし、ボトムはなんでも合はせやすさう」

と云ひながら視線を下に向け、きやあと嬉しさうに聲を上げた。

「ロンドンストライプのパンツかつこいい！　青と黑かー、うん、この青綺麗で良いッスよね」

「これはちよつと、冒險してみた」

「うんうん、瑠璃さんの脚の細さが際立つてるし、マヂでこれはシルエットが綺麗ッス。パンクつぽいゴツいショートブーツも恰好良いし、なるほどー、かういふ恰好が似合ふんスねえ。もつとさういふ服著れば良いのに」

「そんなに褒められると、ちよつとこそばゆいよ」

「人を褒める時はキチッと褒めると、どんどん伸びるんスよ。輝夜の時もさうして教へてきたんスから」

「何それ」

流石、自信たつぷりだ。

途中で宇宙線に乘換へ、此處までで二時間ちよつと。宇宙線と云ふ名前が兔に角恰好が良い。電車の事は良く判らないが、普段通勤で使つてゐる、古ぼけてくたびれた電車よりも數段新しい車輛である。

宇宙驛に近づくにつれ、段々と人が增えてきた。最終的に電車の中は結構ぎゆうぎゆうになつた。久しぶりに「混んだ電車」に乘つた氣がする。

「皆お出かけの恰好みたいだし、結構祭に行く人居るんですかね」

「縣內ではあんまり大きな祭がないからの。最大級ヂャろ」

「著いたら屋臺巡りッスよ」

ルチルが彈んだ聲でさう云ひながら、膝の上で抱へてゐた舊い時計盤を模した柄（プリント）の上に、合皮か何かで出來た短針と長針が貼り付けてあるバッグの中から、ペットボトルのお茶を取り出して一口含んだ。

「……ただし僕の金でな」
「へつへつへ」
宇宙驛に降り立つと、そこはちよつとした人混みになつて仕舞つてゐた。地方の驛の割には結構大きい。驛はかなり舊いが立派で大きいし、新幹線もちやんと停まるやうだし（これは田舍に於いてかなり重要だと思ふ）、そこそこの規模のデパートがいくつも建つてゐる。なるほど、地元の人間に「宇宙市は縣廳所在地よりずつと榮えてゐる」と云はれるのもあながち冗談ではないのかもしれない。
タクシーを捕まへて行くつぽい親子連れもちらほら居るが、殆どの人がバス停の前で無料のシャトルバスを待つてゐるらしい。電車の中が暖かかつた所爲もあつて少し寒い。早めに來ないだらうか、などと考へてしまふ。
「あ、バス來たー！」
子供の甲高い聲につられて顔を上げると、眞つ赤な二臺のシャトルバスがこちらに向かつてやつて來た。行き先は勿論「宇宙興產」となつてゐる。
「結構人居るけど、コレ乘れるんかいの」
「まあ、乘れなくてもまた次が來るでせう」
自然發生した列に竝んでゐたら、二臺目のバスに乘れた。車內は立つてゐる人々で溢れてゐるが、そこまで酷い混雜ではない。
バスに搖られて15分程經つただらうか。バスは宇宙興產駐車場のロータリーにあるバス停で停まつた。
會場へは此處からもう少し歩くらしい。
明るい青地に白い文字で「宇宙まつり」と描かれたのぼりが道のあちこちに立てられてをり、「會場はこちら」の看板と人の流れに從つて歩いていく。近づくにつれてどんどん人が增え、人々が複數あるゲートの處でフォーク狀に列を作らされてゐるのが見えた。
「あそこなんなんスかね」
「爆發物や刃物なんかがないか、あのゲートが檢査するんヂャと。今年は檢査が嚴しいらしい」
「へえ。去年がアレだつたからッスかね？」
勿論普通のテロ對策もあるのだらうが、ついこの間宇宙人に入られたといふ事實もあるのだらう。あれは結局極祕と云ふことになつたさうだ。あれから何度か宇宙省の人たちがやつてきて、宇宙興產で西野さん達と一緒に話を訊かれたが、結局何かがわかつた訣ではなく、最終的には判らない事が多い上に無闇に公開すると不安を煽るから、と口外を禁止された。
ゲートは高速道路の有人料金所のそれに似てゐた。コンクリの土臺に、巨大な白いポール。「宇宙興產正面ゲート」と大きく書かれた文字と、ゲートの手前の看板には「逆走嚴禁」「火氣嚴禁」「テロ對策にご協力ください」の文字列が竝んでゐる。

ゲートは丁度人が一人づつ通るやうな適當な狹さになつてゐて、料金所にあたる部分には何かの檢査裝置らしきものと、宇宙興產の制服を著た人と、複數臺のモニタらしきものが見える。
「此處から6列になつて竝びますー、お手數おかけしますがご協力くださーい」
警備員の聲に從つて、私達は端の方で一列になつた。
「大丈夫かなァ」
「瑠璃さん、何か物騷なもの持つてるんスか」
「いや、持つてはないけど、なんか不安にならない？」
「まあ、多少は疑はれてゐる氣がせんでもないが、仕方ないヂャろ」
「さういふもんスかね？　空港でたまにベルトとか外すの忘れてて金屬探知機に引つ掛る事はあるッスけど」
さう云はれてしまふと、かういふのは馴れの問題なのだらうかとも思ふ。
實際、ゲートはなんの問題もなく通れた。心配のしすぎだつたのかもしれない。

ゲートの先は廣大な敷地であつた。建物と、コンクリと、芝生と、樹木があるが、ただそれだけなので幾分殺風景な感じがする。普段なら重機や車輛が通るのだらう道路は、柵であちこち通行止めになり、赤いロードコーンとコーンバーで仕切られて、そつけなく私達を出迎へるだけである。私の後からゲートを拔けた子供が、はしやいで私達を追ひ越して行く。
ゲートから出てきた人たちがまづパンフレットを受け取ると、そこで立ち止まる人も居て、滯つてのろのろと進んでゐる。
ここから多少進めば、まづは屋臺コーナーから始まるらしい。
「それにしても、人、多いですね……。」
私は、宇宙まつりの會場のパンフレットの地圖を適當に半分ほど廣げて見た。宇宙興產所有のグラウンドと設備を觀る限りでは、敷地は大變廣くとられてゐる筈なのだが、人とロードコーンで大きさが壓縮されてしまつてゐるのか、頭で思つてゐたものよりもずつと狹い。鐵筋で出來た簡素な屋臺も、この通りの兩側と、グラウンドの周りをずらりと圍むやうに展開されてをり、ちよつとした野外フェスの樣な有樣である。
「はぐれんやうにせえよ……ちゥても、式谷ちやんは大丈夫ヂャろな。都會ッ子ヂャし」
「いえ、かういふ混み方は普段の東京と違つて特殊なので、あんまり經驗がないです」
流れにあまり規則性がなく、各々が勝手に行動してゐる中を歩くのは、都會の雜踏を歩くのとはまた別の感覺が必要だ。立ち止まる奴も多いので、スクランブル交差點ともまた違ふ。

だんだんカオス化してきた人の流れの中で、なんとか先頭にゐるルチルの目立つ色の頭を追ふ。

「あつ、りんご飴の屋臺！」

ルチルが嬉しさうに聲を上げた。

「りんご飴好きなんか、ルチル」

「そりやあもう。飴の部分と林檎を無心でガシガシ齧るのがいいんスよ」

ルチルが人の流れを無視して、吸ひ寄せられる樣にりんご飴の屋臺へと足を向けた。屬さんと私は慌てて彼女の後を追ふ。仕方がないので一緒に行列に竝んだ。

「うーん、どれも美味しさう……わあ、アールグレイだつて！」

ルチルが店を覗きこんで指を差す値段表を見れば、確かに【アールグレイ　500圓】とある。

「おつ、シナモンもあるみたいヂャの」

逆側から屬さんが店を覗いて云ふ。

「わあ！　シナモン！　うーん、もう、文字列見て聞いただけで美味しさう、お腹すいてきた」

どうやら、彼女を見てゐると、讀む飯テロ、聞く飯テロなるものもあるらしい。

目の前の客が居なくなつて、さて、私達の番である。

「どーれーにーしーよーうーかーなー……」

ルチルは思ひつきり惱んでゐる。

「僕は姫リンゴね」

「はい、三百圓ね」

屬さんはさつさとお金を拂つて、小さなりんご飴を受け取つた。

「ええと、ぢやあ、普通の――おつきい奴と、アールグレイと、シナモン一個づつ！」

「千五百圓ですね」

「そんなに喰ふのか」

「食べますよゥ。美味しいものは何個だつて食べられます……あ、」

さう云ひながら、屬さんを引張る。

「サッカンお金頂戴！　あと瑠璃さんも何か頼みませうよ」

「はいはい。式谷ちやん何がいい？」

「うーん、ぢやあ、普通の大きいやつで」

「先程の註文と合はせて、二千圓です」

屬さんが再び財布を取り出し、支拂ひを濟ませる。

「どうもー、ありがたうございまーす」

「やれやれ。こりやあ先が思ひやられるな」

屬さんはあつといふ間に小さなりんご飴を食べ切つてしまひ、ルチルはいはゆるりんご飴の「底」になつてゐた部分を呑氣にガジガジと齒で齧つてゐる。曰く、アールグレイは香り高くて

美味しいとのこと。
私はと云へば、買つてはみたものの――まだ食べずにくるくると指で割り箸を弄びながら、食べようか食べまいかと惱んでゐた。食べるなら一氣に食べてしまひたいけれども、食べてゐる間に他の屋臺に寄つたりなどしたら、食べかけになつて仕舞つてなんだか食べにくくなるのが嫌なのだ。結局、食べずに鞄の中に入れた。歸つてから食べる豫定にしておかう。
「んッ！」
ルチルがいきなり射的の店の前で足をとめた。後からついてきてゐた私達は思はずぶつかりさうになり、慌ててぶつからない様に、體をぐいと斜めに傾けて彼女の體を避けた。
「あれ欲しいッス、4番、4番、ちつちやいねこちやん」
女の子の人形が入つた長細い箱。車やロボットのプラモデルの箱。ライターになつてる銃の箱……これ、ゲーセンでゲットした事がある。流行のアイドルのDVD。スポーツカーの寫眞の箱、多分スケールモデルなのだらう。最新ゲームのハードウエアと、ファミコンのパチモノみたいな謎ハードの寫眞が貼られた大きめの箱が仲良く竝んでゐる。大きなくまのぬひぐるみやエアガンも後ろにぶら下がつてゐるので、棚の中のどこかにはエアガンの箱、ぬひぐるみの箱、みたいなのもあるのだらう。
彼女が指差す先にあつたのは、「4」と書かれた紙が首にぶら下がつてゐる、白くて小さくてふはふはな猫のぬひぐるみである。
「サッカーン、よろしくー」
「え、僕がやるの？　あのモチつぽい奴？」
「餅？　何云つてるんスか、4番スよ4番、棚の一番上」
「へえへえ」
屬さんは後頭部をぼりぼり掻いて、銃を持ち上げて銃身などを見ながら選び始めた。
「ま、これかノォ……ほいで、4番は……アレか。猫ちやーん、待つててねー。あ、をつちやん、彈頂戴」
「三回で五百圓ね」
「はーいどーぞ」
大柄で前掛けをした店主に差し出した五百圓玉の替はりに、コルク彈の三つ入つたアルミか何かの皿が、ぬつと雜に差し出される。ちよつとヤニくさい。
「射的なんて何年ぶりかいの」
「サッカン頑張れ！」
肩を大きくぐりぐりと回し、ふー、と大きく息を吐いた屬さんが、コルク彈を指でぐいぐい突つ込む。ぐつと乘り出す様に射的の臺に體を乘せ、目を細め――引き金を引いた。
ぱんッ、ぱちッ
輕い音がして、猫の左側に彈が當たり、少し斜めになつた。
「あ、當つた！　すごい！」

「落ちんにやあ意味がなからう」
屬さんはさう云つて、もう一度銃身にコルクの彈をきつちりと詰めた。
「んー……かう……何かなあ……何か變ヂャの」
コルクの彈をもう一度詰め直し、再び構へて引き金に指を當てる。
「屬さん？」
「うーん、今はちよつとゴメン、考へさせてくれいーや」
「すみません」
どうやら、邪魔をして仕舞つた樣だ。
「もうちよつと上か？」
銃身をく、と少しだけ上げ
「違ふな、さうヂャない、根本的に——」
暫くぶつぶつと呟いてゐたが、やがてぴたりと口を閉ぢて默つた。
屬さんはふうー、と長く息を吐き、吸ひ、繰返して——もう一度、引き金を引く。

ぱん、ばちっ

今度は、猫が全體的に奥へ下がつた。
「當たるんヂャけど、倒れんの。まあ、普通はこんなもんヂャらうかの……普通は……」
焦つてゐるのか、それとも單に痒いのか、金色の髪をばりばりもさもさと掻いてゐる。
「彈追加するッスかー？」
「いや……もし倒れんかつたらの。次は倒れる——うん、倒れる、次は倒れるぞ」
何かを試案するかのやうに口元を手で抑へてゐた屬さんが、何かの結論を導き出したかの樣なスッキリした顏で云つた。
「まあ見ちよきんさい、僕は射擊の腕はこれでも現役ヂャけえの。」
三發目の彈を無理矢理の樣に深く銃身の奥に詰め、その流れで流麗にさつと構へた。肩の力が拔けたかの樣に自然に構へ、引き金を引く。

ぱん！　……ごとっ

「あ、ねこゲットーーー！」
銃口から放たれたコルク彈に彈かれ、猫のぬひぐるみは猫の底をこちらに向けて横たはつてゐる。
「へえー、お兄ちやん射的上手いねえ。彼女にカッコイイ所見せられたぢやないの」
倒れると思つてゐなかつたのであらう。店主は輕口を叩きながらも驚きの表情を隱せないといつた風である。

「彼女ヂャないんですよ、僕の會社の子で」
「あら、こんな可愛いのに彼女ぢやないんだー、勿體ない」
「へつへつへー」
テキ屋のおつちやんが、猫のぬひぐるみを棚から下ろして、首にかけた紐を外しながら更に輕口を叩く。ルチルは可愛いと云はれたからか、聲だけで一應笑つてゐる。
「この猫ちやんね、はいどうぞ」
「わーい！　あざッス！」

無地の茶色い紙袋に、白い猫のぬひぐるみを入れて貰ひ、ルチルは嬉しさうに射的屋を後にした。

「……なんか私達、振り回されてません？」
「ほうヂャの。泣く子とルチルには勝てん」
「なんスかそれ」
ルチルがこちらを見ながら、やや不服さうな顔をしてゐる。
「いや……なんでもないなんでもない」
なんだかんだで自由に振る舞ふ彼女は愛らしいのだ。大袈裟に肩を竦めた屬さんを見て、思はず顔がほころぶ。
「次は……瑠璃さん、はしまき食べませう、はしまき」
「はしまき？」
なんだそれは。

「關西風のお好み燒きつぽいものが箸にかう、卷いちやる食べ物なんヂャけど……え、知らん？」
「知らないですね」
味もビジュアルも容易に想像はできたが、やはりその名前は知らない。
「東京には無いんか……」
「ぢやあ瑠璃さん、初はしまきッスね」
りんご飴の中身のりんごを齧りながらさう云つて、ルチルがまた屋臺に吸ひ寄せられていく。その店ののれんには「はしまき」と書かれてをり、鐵板の上を覗くと、なるほどソースのかかつたお好み燒きを壓縮したつぽいものが箸に卷いてある物體が竝んでゐる。なるほど、「はし」「まき」だ。
屋臺の奥には小さな休憩スペースがあつた。折りたたみの椅子と机が竝んでをり、親子連れなどがそこで隣の屋臺で買へる餽飩を食べてゐる。
「すみませーん、三つくださーい」
「はいよ」
「一個四百圓ッスね、三つで千二百圓」
一卷き、とかではないのだらうか。まあ、數詞はなんでもいい。
屬さんは財布から二千圓を出す。私も財布を出さうとしたが、今日は奢りだつたと思ひ出した。さうだつたさうだつた。
屋臺の主は、鐵板の上のはしまきを、透明なプラスチックの

パックに二個入りと一個入りに分けて入れてゐる。經費の問題なのか、一個づつの包裝にはしないやうだ。
二つのパックをビニール袋に入れたものを私が受け取り、その隣でお釣りを屬さんが受け取る。
ふと見ると、休憩スペースの奥に丁度椅子が空いてゐる場所がある。
「この奥で食べませうか」
「さうッスね、バスで疲れたしちよつと坐りたい感じッスね」

奥の席は四つほど餘つてゐた。
「まづはりんご飴食べてからはしまきにするッス、とりあへず二人ではしまきをどぞー」
「うん、ぢやあお先にいただきます」
口の中でしやくしやく云ひながらルチルが一番端の席に坐つた。
「ぬひぐるみは鞄に入れると潰れちやふから入れたくないッスね。んー、ねこちや〜〜〜ん」
ルチルは語尾にハートマークが著く勢ひで、猫のぬひぐるみを取り出す。
「ウチごはん食べるからちよつと此處で待つててねー」
まるで子供の様に、テーブルの上にタオルハンカチを敷いて、その上にぬひぐるみを置いて話しかけてゐる。
「ルチル、テーブルの上のタレとかジュースとかで猫汚すなよ」
「汚さないッスよ、折角ウチのものになつた、ラブリーでふはふはなねこちやんなんスからね。ちやんとハンカチ敷いたし」
私ははしまきのパックを取り出し、ルチルの方に一個入りのパックを置いて、二個入りのパックを屬さんと分け合ふ事にした。
「おつしや、いたーだきます！」
屬さんはがぶりとはしまきにかぶりつき、はふはふと口から湯氣を出した。
「あつちい、うめえ」
私もはしまきを食べる。多分——
「ん……これは……」
もぐもぐと味はつて、咀嚼して、飲み込んだ。
「……思つた以上に想像通りの味ですね」
「ヂャろ？　これがええんよ」
薄い小麥粉の生地、小さく切つた豚肉、お好み燒きのソースと、かつを節、青のり。確かに旨いが、想像の範圍内で旨いといふ感じだ。何處か懐かしく、少し駄菓子つぽさもある。
「十二時からライブあるみたいッス」
「へえ」
小さくなつたりんご飴のりんご部分の殘りをしやぐしやぐと嚙みながら、ルチルはパンフレットの裏面を眺めてゐる。

「誰？」
「んー、ゴルゴ平澤？　お笑ひ藝人みたいな名前ッスね」
全然知らない。私もなんとなくパンフを廣げてみた。パンフの裏面は二色刷りで、奇妙な形のコントラバスらしき絃樂器を構へた、黑盡くめの鋭い眼光の男性の寫眞が載つてゐる。顏を見ても全く判らない。
「『縣內初ライブ！　音を紡ぐ音妙師（おんめうじ）の世界へようこそ』……え、煽りだけ？　說明はないのかな」
「えーと、ゴルゴ平澤……」ルチルが謎柄のシリコンカバーをかけた小ぶりのタブレットで檢索をかけてゐる。「ウィキペディアもなんだかぼんやりしてるなァ、愛稱は『導師』、職業は音樂遣ひ、生年月日は不詳だけど十九歲でメジャーデビューしてゐて、それが間違ひでなければそろそろ還曆の筈……ええと、別名義での樂曲提供や、同人誌でのSF執筆なども手がけてゐる……だつて。ウィキペディアは要出典と獨自研究の山ッスね」
「ミュージシャン、ぢやないんか」
「音樂以外では趣味は發電とか書いてあるッス、本當に意味がわからないッスね……ライブはバンドも組んでた昔は兔も角、ソロになつてから最近は都內でしかやらないみたいッスけど、なんでこんな僻地に呼ばれたんスかね。東京に行つた時に熱烈なファンになつたスポンサーでもゐるのかなァ」
「最近の音樂はインターネットで容易に聽けるからの。何處で火が著くかわからんもんよ」
「インターネットでの無料の樂曲發表と、動畫サイトでのファンの紹介や、カバーで演奏した素人の動畫に面白く反應したとかでファンのハートを摑んだとか書いてあるッス」
「へーえ」
「結論としては一部には有名人、といつた所なんスかね？」
さう云つてルチルはタブレットのカバーを閉ぢた。
「さうヂャらうの」
「觀ます？　ライブ」
「折角ヂャし觀ようか。場所は？」
「『クラビウス』……グラウンドの端つこに中央ステージがあるみたいッスね」
「ほーん……、あ、あつた。あれかな。なんか準備してる」
屬さんが立つて見回す。
「クラビウスつて月のクレーターの名前らしいッス。ちなみにこのグラウンドの名前は月輪（ぐわちりん）だつて」
「そこは日本語なんだ」
「みたいッスね」
「んぢや此處でルチルが箸卷き喰つたら丁度いい時間かな」
屬さんが腕時計を見ながら呟く。
「ならさつさと食べちやはう」
かうしてルチルは、最早飴成分を殆ど殘さぬ林檎を芯の近くまで食べ終はり、箸卷きに手を伸ばしたのであつた。普通、林

檎一個でお腹いつぱいにならないのだらうか？

――――

開演十五分前、クラビウスステージのそれなりに後ろの方に居坐る事にした。正統派四つ打ちテクノ調の輕快な出囃子がスピーカーから鳴り響く。

既にステージの前の方は、黑盡くめの集團が埋めてゐた。おそらくゴルゴ平澤のファンだらう。鮮やかな靑色の幾何學模樣の描かれた、お揃ひの小さい黑いバッグがやけにあちこちで目立つ。ライブの物販だつたんだらうか。

ぼんやりとした紗幕（しやまく）が、舞臺と客席を仕切つてゐる。僅かな風に搖れる幕には、何らかの曖昧な映像――昔のフィルム撮影がソースなのだらうか、妙に汚れてゐて、舊い。均一に、單調な動きをする人々が延々と映し出されてゐて、軍隊か何かの行進に見える。

「まもなく、ゴルゴ平澤のライブ『再歸する宇宙』が始まります。どうぞ皆樣、中央ステージ『クラビウス』へとお越しください」

アナウンスが流れて、だんだんステージ周邊が混んできた氣がする。

「實は野外ライブ初めてなんスよ」

ルチルはペットボトルのお茶を飲みながら嬉しさうにしてゐる。

「フェスなんかは他の演者がライブしちよる時に別のステージで機材のセッティングしとるのとか觀られて面白いぞ」

「へえー、今度さういふのも行つてみたいッス」

「うん、夏だとK市が海邊でフェスやるから、一緒に行かう」

「――尙、錄畫行爲、撮影行爲などはご遠慮いただいてをります。また、モッシュダイブなどの危險行爲などが發生した場合は客席からの强制退場、もしくはライブの中斷などに至る場合がございます」

野外ライブをきちんと見るとは思つてなかつたのだが、歩き疲れない樣にと思つて選んだ靴が、ヒールのある靴とかでなくて良かつた。人の足をヒールで踏んだら大慘事になつてしまふ。

「まもなく開演です。ゴルゴ平澤の縣內初ライブをどうぞお樂しみください」

「お、始まるか」

「さういへばウィキペディアにはジャンルが書いてなかつたッスね。どんなのか樂しみッス」

「モッシュダイブの注意事項があつたからロックとかかと思つたんだけど、違ふのかな？」

ギューーウウーーン、と泣き叫ぶやうな悲鳴を上げるギターの音が空間を切り裂いた。

一瞬靜まつた客席。一轉して「導師！」「ヒラサハー！」などと歡聲を上げる前列の人々。そして前列は熱狂的な——つられて後ろの人々がぱらぱらと拍手をして出迎へる。それが始まりだつた。

紗幕の上を歩く人々の群れがフラクタル狀に展開し、あつと云ふ間に幕とともに搔き消える。

散らかしたのかと思はれるほど複雜な機材の山の前で、一人の男が、眞紅の變形ギターのトレモロアームを引き絞つた恰好ですつと立つてゐた。

黑い髪は輕く後ろに向かつて撫で付けられてゐて、五十路を過ぎてゐるとは思へない若々しい容貌。艶のある鼈甲のやうな不思議な色の瞳。軍服の樣な、露出度の低い、襟や袖に金絲で不可思議でオカルトめいた模樣が施された、黑盡くめの詰め襟とズボン。左耳にはインカムマイクがかけられてゐるのが見える。

一瞬ギターがふはりと空を舞つた。重力に任せて落ちるギターのボディが、激しく膝で蹴り上げられる！

もはやギターパフォーマンスと云ふよりも、まるで生き物の樣に暴れるギターを全身で制禦する男といふ繪に見える。上へ下へ、一周大きくぐるりと旋回するギターは、さながら暴れ牛の樣だ。さういへばエレキギターに必須なアンプにつながるやうな物理的配線が無い。カメラだつてＷｉ－Ｆｉを飛ばせるこの時代、今時はギターも無線で情報が飛ばせるのかもしれない。

ギターはうなり、すすり泣き、絹を裂くやうな酷く金屬的な悲鳴をあげる。その音には隙がない。そのうちギターは歌ふ樣に旋律を奏で、ファルセットと演歌のやうな「こぶし」が時折混ざる歌聲が旋律のパートのひとつとして加はる。ＡメロＢメロなるものもどこか曖昧で、主題と副題をじつとりと繰り返すやうな構成になつてゐる。

彼の派手なパフォーマンスに氣を取られて舞臺をよく見てゐなかつたが、キーボード二人とベースの人はサイバーサングラスと黑いマントと和服と云ふ奇妙な恰好で、三人とも帶刀してゐる。ドラムの人はここからだとよくわからないが、同じ舞臺衣裳なら下げてゐるのかもしれない。

ドラムの人はすつきりとした短髪で、下手側に奇妙な裝置に圍まれた三臺のキーボードがあつて、頭がパーマでふはふはな茶髪の男性と、さらりとした黑髪の男性の二人でそのキーボー

ドと裝置を弄つてゐる。昔つぽいシンセとキラキラピコピコした音や、シンセで再現した絃樂器の旋律が奇妙にからみあつてゐる。上手側ではツーブロックヘアの男性が發條の玩具の樣に跳ねながらベースを奏でてゐて、なんといふか、變拍子やテンポの變化や音の奇妙さと相まつて、實に宗教めいてゐる。

「すごいライブッスね」

ルチルが私の袖を少しだけ引いて呟く。

「もうちよつと振りきれると完全に放送できなくなりさう」

實に樣々な方面に於いてギリギリである。こんなバンドが居て良いのか。あ、だから地方に來ないんだ。

前の方はわさわさうねうねと曲に合はせてリズムを取つてゐるが、一般人と思しき人々をそつと見回すと、皆、手拍子も出來ずただ口をぽんやりと開けて棒立ちしてゐる。

とはいへ、つまらないとか、さう云ふ事はない。充分に樂しいし、演奏も素晴らしいのだが、身體表現として、どうすれば良いのか、何が適切なのかわからない。初めて食べた料理の味があまりに複雜すぎて絶句してしまふ、あの感覺に似てゐる。

曲と云ふより、これは、ひとつの物語だつた。

――

ライブが終了して、紗幕が再び完全にステージを隱し、ミステリーサークルの樣なロゴと公式サイトのURLが表示されてなほ、私はそこを動けずに居た。

十何曲か演奏されたが、アクの强いひとつひとつの樂曲を「聽く」事だけで精一杯だつた。私はただ語りかける音の前に壓倒され、途方に暮れてしまつたのだ。贊辭の拍手は惜しみなく送つたが、これで足りたとは思へない。思へないので――

「すみません、物販でCD買つてきます」

「お、ハマりましたな、式谷ちやん」

「ハマつたと云ふか、なんだらう、どう云へばいいのかわからないので、もつと聽きたい」

「ウチも買ふ！　全然分からないけど超良かつた！　事務所で流す！」

「承認！」

「やつたー！」

物販はグラウンド近くのビーナス・ドームで行はれてゐると云ふアナウンスがあつた。

ドームの中では地元の名產品と、宇宙興產オリジナルグッズも賣られてゐた。

「これは後でチェックッスね」

「僕宇宙興産のネクタイピンとカフスのセット欲しい」
色々と見て回りながら、奥にあるゴルゴ平澤の物販コーナーにたどり著く。どうみても大手レコード會社から大々的に賣つてゐる、といつた風ではなく、事務所のスタッフとボランティアが頑張つてゐる感じだ。
壁に吊るしてあるTシャツには全部謎のデザインがプリントされてゐる。一番わかり易いのはチェ・ゲバラのTシャツのやうに、ゴルゴ平澤の顔が黒地のTシャツに赤と白色でデザインされたものだらう。街中で著てゐたら共産主義者と間違はれるのではなからうか。
「すみませ〜ん、出てるCDつてこれで全部ですか？」
ルチルが甘つたるい聲でスタッフに尋ねる。
「いいえ、今日はこの10年で出たCDだけ持つて來てゐます」
「さうですかァ。ぢやあ、今あるCD一枚づつ全部くださーい、あとあのお顔のTシャツ、レディースのMサイズ！」
本氣か。
「分かりました、お包み致しますので少々お待ちください」
「おいおいルチル、それは金出せんぞ」
「勿論、當たり前ッス。かういふ時こそ大人買ひ！」
いつも使つてゐる、ピンクと黒の可愛い長財布を取り出しながら、ルチルが威勢よく云つた。
「だから金が貯まらないんだぞ」
「うへー、分かつてるッスよォ」
ルチルが氣前良くそんな事を云つたこの後で最新一枚だけくださいといふのは、正當なのに何故か云ひづらい。
「お次の方、レジお待ちでしたらどうぞ」
CDをぼんやりと眺めてゐたら、ルチルの應對をしてゐるのとは別のスタッフが聲をかけてきた。
「あ、はい、ええと」
まだきちんと見てゐなかつたので、思はず少し目が泳ぐ。最新作のポップが貼つてあるCDを指さして、
「……これ、お願ひします」
あー、云へた。良かつた。
……なんでこんな事で要らぬ緊張を強ひられなければならんのだらうか……いや、ルチルは悪くない、悪くないのだが。
「いやー、收穫收穫」
ルチルはノベルティと思しき、黒地にピカピカとした青いミステリーサークルみたいな不可思議ロゴが描かれた不織布のバッグに入れて貰つてご機嫌である。
「最近はCD取り込んだら連續で全部聽けるからいいですよね」
「昔はカセットとかMDヂャッたの」
「あ、懐かしい。MDの交換とかよくしました」
「ウチらは結構CD燒いてたッス、インターネットで無料の良い樂曲とかマッシュアップを見つけてきてダウンロードして、

學校で皆でああだかうだ云ふのが面白かつたんスよ。まだ懷かしのもせとかワレズが横行してゐた時期ッスね」
「それはかなりセンスが問はれるの」
「マイナーなジャンルやインディーズの樂曲持つてるのがちよつとしたステータスなんで、もうかういふの完全に癖ッスね」
音樂業界は、案外かういふ人に支へられてゐるのかもしれない。
「企業ブースも見て回りますか」
「當然」
「やつぱり宇宙興産ブース見たいッスもんね」

宇宙興産ブースには樣々なグッズが竝んでゐた。
社内デザイナーの育成に力を入れてゐて、かなりセンスがいいと云ふ噂はあつたが、イベントでの販賣は豫想以上に賑はつてゐる。
「企業ロゴの由來」と書いてあるパネルを見ると、元々社章は創業者の家紋である、月輪の中に、枝に咲く櫻、の意匠がベースらしい。それを元にした樣々なデザインのロゴがあるらしく、どれも恰好が良い。
「ぢやあさつきのグラウンドの名前は、この家紋から來てる事になるのかな」
「さうみたいッスね」
「家紋つてカッコイイの結構多いつちやの」
「この湯飲みカッコイイつすね、昔のロゴしぶーい！」
あ、なんとなくルチルの物欲ゲージの高まりを感じる。もしかして、お金がないといふのは「あくまでもルチル基準で金が無いだけで、庶民の私から見ると隨分持つてゐる」のかもしれない。おうちからしてお金持ちさうだつたし。
「こりャ、使ひ過ぎはダメだつて云つたヂャろ」
「うーん、さうなんスよねェ。現物チェックだけして後で通販するかなー」
あれ？
「ところで、なぜ屬さんがルチルのお金の遣ひ道に口を出すんです？」
「ルチルは金錢感覺がゼロに近くての、就職したての頃はそりやあ酷かつた」
「普通に遣ふと、何故か三日でお給料つて無くなるんスよねえ」
「ひええ」
「このままだと自立できないのに氣が附いたのは社會人になつてからッス」
「思つたよりとんでもなかつた」
「ヂャろ？」
かなり特殊な家庭だつた。
「お金がないなら仕方ないッスね、また今度にするッス」

「僕はお目當てのネクタイピンとカフスのセット買ふからちよつと待つてて」
「はーい」

「ルチル、この後はどうする？」
「さうッスねー」
ルチルはパンフレットを取り出し、タイムテーブルを指さす。
「ゴルゴさんのライブさつき終はつたでせうー？　あ、もう少ししたらまたあそこで業界ウォッチショーやるらしいッスけど」
「業界ウォッチかァ」
今子供たちの間で流行つてゐるアニメである。タイトル位は私でも知つてゐるが、内容は良くわからない。謎の業界人が多數出てくるらしいが、それが面白いのだらうか？
「基本的に昔流行つたもののパロディやオマージュが多いんスけど、二十五話の『社畜犬誕生の祕密』は神回だつたッス」
「……面白いの？」
「うーん、詰まらない回はかなり辛いッスけど、面白い時はやたら當たりなので觀るのやめられないんスよ」
「おまたせ」
「サッカンおかへり」
「あと少ししかなかつた、危ねえ危ねえ」
「買へて良かつたですね」

「次何處行くか決めた？」
「まだッス。えーと、業界ウォッチショーの他は……」
屬さんも尻ポケットに入つてゐたぐにやぐにやのパンフレットを取り出して眺める。
「お、すげえ、敷地内つて云ふか會場の範圍内ギリギリにコンビニあるぞ。やつぱり構内が廣いからかの。そこでルチルのCDを送つたらええんヂャないんか？」
「さうッスね。手荷物として重たくはないけど、折角ぷらぷらするんだし、やつぱり手が空いた方がいいッスもんね」
「行かうか」

コンビニはさう遠くなかつた。ビーナスドームよりももう少し本社ビルに近い所に、見た事がない名前の大きなコンビニが建つてゐる。側には四疊半程度の喫煙室もあつて、なかなかサボるのに快適さうだ。
「ついでに珈琲のボトルタイプのやつでも買はうかな」
「ジュースなら露店でも賣つてるけど、珈琲はなささうッスからね」
コンビニの中では普通に制服や作業著の社員らしき人がお辨當だのカップ麺だのを買つてゐる。少し外れた場所にある所爲か、外部の客は少ないみたいだ。
「煙草あるヂャん。僕も煙草買お」
「ぢやあウチは荷物送るッス」

私は珈琲のボトルタイプを眺めるが、何故か妙にボトルタイプの品揃へがいい。そこら邊のコンビニより凄いんぢやなからうか。
「どれがいいかな」
少し迷つて、微糖の豆乳たつぷりカフェオレにする事にした。おまけに業界ウォッチのストラップが附いてゐるので、更に迷ふ。ぱつと目についたのは、黒い服を著た灰色のタレ目の猫のキャラクターだつた。
「しにたいニャン」
縁起でもない。もう一匹、同じ顔で白い猫のキャラクターが横に竝んでゐる。
「……ねれないニャン？　なんかこの猫、ピンクのパジャマだし枕持つてて可愛いな。これにしよ」
レジで會計を濟ませ、テープを貼り付けて貰つて鞄にしまふ。ルチルは私が迷つてゐる間に荷物を送つたらしい。
さてコンビニを出ようとすると、なんだかトイレに行きたくなつてしまつた。
「あー、ごめん、なんかトイレ行きたくなつたから行つてくる」
「かういふイベントの時は出來るだけコンビニで行つた方が樂ッスからね、お外で待つてるッス」
「ごめんね」
なんだか要領が悪い感じになつてしまつた。反省しよう。

できるだけ急いでトイレから出てくると、コンビニの外に眞つ黒い風體の男の背中が見えた。
「ん？」
何やら先ほどのライブの舞臺に居たやうなマントの男がルチルたちに近づいてゐるやうだ。
ただ、ステージの上の男性たちよりはかなり背が高い樣に見えるし、ああいふ感じのふはつとした癖つ毛の黒い髪、みたいな髪型の人は居なかつた。ファンの假裝だらうか。
その横顔を見ると――それは、兄だつた。
「鋼兄さん……なんでこんな所に？」
あの眼差し。薄い唇。目元の泣きボクロ。間違ひない。
ゴミ箱の近くにゐた屬さんとルチルに近づく兄の姿が見える。どうしたんだらう。
思ひつめた樣な顔をした兄。もしかしたら、何かあつたのかもしれない。手を拭いたハンカチをしまふ。コンビニの自動ドアが開くと、そこには刀を構へた兄がゐた。
「えッ」
鋼兄さんがルチルに向かつて刀を振り下ろす――ルチルの目の前でパァン、と虹色の閃光が散つた。
「きやあッ」
「うッ」
刀が彈かれて、鋼兄さんが玩具の樣に吹つ飛ぶ。あ、ちやん

と和服著てる。やつぱりコスプレか。
「兄さん！」
「くそ、痛ェ」
コンビニの壁まで吹き飛ばされた兄が、壁を使つて立ち上がる。
「ルチル、大丈夫？」
「ウチはなんともないッス、でも、兄さんつて、この人お兄さんなんスか」
「うん……鋼兄さん！　どうしてこんな事を」
「瑠璃、お前には關係ない。いいからその紙袋を渡してくれ」
さう云はれてルチルはさつと紙袋を後ろに隠す。
「嫌ッスよ！　ねこちやんはウチのッス！」
「それは危險なんだ」
「ただのぬひぐるみに危險も何も無いッスよ！　ていふか、いくら瑠璃さんのお兄さんでも警察呼ぶッスよ！」
ですよねー。ぬひぐるみが超絶危險でも、これは警察呼ばれても仕方がないですね。
「駄目だ！　一般人が扱つて良いものぢやない！　嫌と云つても無理矢理でも奪ひ取る――」
「はい兄さんストップ」
私の前で猛然と驅け出した兄に向かつて――私は膝で兄の腹を蹴つた。
「ォゴッ……げほッ、おえッ……るり、なんで」
その場に崩折れる兄が、私の方を見て、少し悲しさうな目をした。
「なんで、もクソもありませんよ。話を聞きもしないで力づくなんて、私は許しません」
「うわー、式谷ちやん結構容赦無いな、身内だらう？」
「身内だからこそです。兄が暴走して大變申し訳ありません」
「瑠璃さん、このねこちやんは危なくないッスよね？」
ルチルが涙目になつてゐる。馬鹿兄貴。
「私が見た限りでは普通のぬひぐるみですよ」
「お前には何も見えてゐないんだらうが、俺には、いや、俺の刀には判る」
ふらりと立ち上がりながら、兄が刀をルチルに向かつて構へる。
「――さうみたいね。厭だわ、野蠻な地球人。あたしがシールドを展開しなかつたら、そのナマクラがギャル女に當たつてゐたわよ」
唐突に聲がした。
しかも、ルチルの持つた紙袋の中から。
「ねこちやん？」
ルチルが紙袋を胸で抱へて覗きこむ。もそり、と紙袋が動いて、中からぬひぐるみの猫の手がぬつと出てきた。

「まさか、これ、生きちよるんか」
猫――いや、それは、確實にメンヘラン星人だ。躰中の毛穴が一齊に總毛立つ。
「なんで氣がつかなかつたんだらう……」
そんな氣配は全くなかつたのに。
「これまで、まさに猫のぬひぐるみだつたからさ。俺の刀はメンヘラン星の缺片で出來てゐる。メンヘラン星人を强烈に惹きつけるし、俺の刀もまた强烈にメンヘラン星の臭ひを嗅ぎ當てる」

「ああ、懷かしい、故鄕の土の馨がするわ。素敵な刀ね」
「ねこちやんかはいーい」
ルチルは猫の喉をくりくりと撫でてゐる。猫は抵抗もしないが、かといつて心地よささうにもしてゐない。
「兎に角、その物騷なモノを仕舞つてください、兄さん」
「詳しい話はそこの喫煙所でしませうか、ええと、式谷ちやんのお兄さん。此處はほら、寒いし」
私と屬さんに云はれて、兄は澁々刀を鞘に收めた。
「分かつた。そこで話をしよう。逃げるなよ、宇宙人」
「厭な男ね。逃げやしないわよ」
喫煙所は新しい所爲もあるのか、ど眞ん中の灰皿に吸ひ殼が溜つて居るのに、思つたより煙草臭くなかつた。常に空氣淸淨機が作動してゐるのか、多少音が煩い氣はするが。
皆が簡素なベンチに坐るなかで、兄だけが立つたままでゐる。
「なんで單獨行動してるんですか。越智さんは？」
「俺はメンヘラン星人を察知したから探してた。越智君は素人ぢやないけれど、まあ宇宙人と戰ふのは危ないから別行動だよ。後で綜合案內所で落ち合ふ豫定だつたんだけど」
「あなたも式谷のものかしら。そこの式谷の女と同じ臭ひを感じるわ」
猫はルチルに撫でられながら、膝の上でゆつたりと坐りこんでゐる。まるで初めからさういふものであつたかのやうに。
「俺は式谷鋼。瑠璃の兄だ」
「さう、あたしは――もう名前がないのだわ。かつてパイロープとユークレースだつたものだけれども、今はただの猫を模した殘りカスなの」
「だつたもの？」
では、今はなんだと云ふのだらう。
「あたしは、カップリングしたメンヘラン星人の記憶と經驗の殘滓でしかないの。懷かしい故鄕の臭ひを感じるだけの本能は殘つてゐるけれど、基本的には無力だわ――といふわけで、貴方達に害を與へたりする事はないわ。だつて、かうなつてしまへばあとはぢきに終はるだけの命だから、もう意味が無いのだ

もの」
「……それは信用しても良いのか？」
兄が低い聲で言葉を投げかける。
「別に信用しなくても良いわよ？」
「ええつと、僕、さつき甘酒買つてきたんですよ。お兄さん、飲みます？」
ギスギスとした一人と一匹の間を割る樣に、鞄から甘酒の罐をふたつ取り出して、屬さんが體を乘り出す。
「僕のはこのとほり、ちやんとあるんで」
罐のひとつを差し出しながら、屬さんはにこりと笑つた。
「……ぢやあ、折角だし、いただきます」
兄は、三度程振つた甘酒の罐をぷしゆりと開けて、一口飲んだ。だが、まだ落ち著かない樣子で、猫のはうをじつと見てゐる。

「それにしてもその刀は良いわね」
さう云はれて兄は、そつと刀の柄に手を當てる。
「あら、私にまた刀を向けるつもり？　でも、それは所詮なまくらなのだわ。當たり前よ。その刀は特殊な刀。ものを斬るためにはメンヘラン星人の承認が必要なのだわ」
「どういふ事だ」
「基本的には刀には作り手や持ち主などの魂が宿るのだけれども、その刀は、生きてゐるメンヘラン星人の魂そのものを宿らせる必要があるの。これがどういふ事か、貴方に判るかしら？」
「つまり、この刀の眞の力を使ふには、メンヘラン星人と協力しなければ駄目だと云ふことか……」
「さういふ事ね。貴方がメンヘラン星人についてどう思つてるかは——まあ見たら判るけれども、敵對的よね」
「當然だ。瑠璃がお前たちの同胞にされた事は、俺にとつてとても許されない事だからな」

急激に手足が冷たくなる。息苦しい。出來るだけ、己の記憶を客觀的に觀る樣に意識を向ける。あれは昔だ。今の私ではない。話題に出した兄が惡い訣ではない。
「それが何かは存じ上げないけれども、あたしには關係のない事だわね」
猫はぱたり、と一度尻尾を振つて、もそりと體を動かした。この猫を叩き殺すイメージが腦のなかを一瞬かすめる。駄目だ。それは何の解決にもならない。手を握つたり開いたりを繰り返す。氣が附かれない樣に、深呼吸をする。私は考へるのを强制的にやめ、話に集中することにした。

「パイロープはただの賢者の石の生產者で、ユークレースに至つてはただの眞面目な勞働者よ。愼ましいものぢやないの」
「ほいでもお前たちがあはよくば日本を侵略しようとしてゐる

事に變はりはなからうが」
　屬さんが口をはさむ。
「だつて、日本はとつても快適なんだもの。私達が住むにはぴつたりだわ、人間さへ居なければ。先程だつてまさかハンティングの的にされるとは思つてゐなかつたのだから吃驚したわ、地球人らしい野蠻な遊びね」
「おう、さういへばなんであんなところにをつたんヂャ」
「歩いてゐて疲れたから、棚のものを勝手に除けてスリープモードにしてたら、知らないうちに首になんかかけられたのよお」
「陳列棚、あれつて勝手に乘つてたんだ……」
「やつぱり。だから彈が當たる少し前で、コルク彈が急に止まつた様にはじかれてて、様子がをかしかつたのか」
「見てる彈に態々當たるなんて厭ぢやない、例へ痛くなくても心理的に厭よ」
　まあ、それはさうかもしれない。
「別に倒れなくても良かつたんぢやないッスか」
「射撃の腕の良い超絶マシンガンの透輝サンに、コルク彈とは云へどもしつッこく撃たれてちやあたしだつて堪らないわよ、倒れればもう撃たれないつて雰圍氣で分かつたから、おとなしく倒れたわ」
「その仇名やめろ」
　パイロープの知識の殘滓が、屬さんをさう呼ぶのだらうか。
「それにしても、瑠璃さんは本當に氣が付かなかつたんスね」
「だつてあたしは完全に猫の形をしたものになつたのよ。地上に居る猫と違ふのは、命を永らへる爲のスリープモードがある事と、元々が宇宙人だつた事と、まあ、喋る事くらゐかしらね」
「確かに、さつきと違つて、ちよつと大きくて、重たくつてあつたかくて、しかも柔らかいッスね」
　ルチルがふに、と猫の背中を指でつつくと、指が毛の中にもふりと沈んだ。
「はあ、やーらかい……あつたかい……」
「ルチル、完全に癒やされてるな」
「ギャル人間、あたしで癒やされてゐる場合ではないのだわ。貴方達には、他の宇宙人がこちらに近づいてゐるのが判らないの？」
「えッ」
　私には何も感じられない。そもそも、私の感覺はほとんど視角が頼りなので、「對象が見えなければ何も判らない」のだ。
「あたしはメンヘラン星人以外の宇宙人が嫌ひなの。さあ、此處だと刀も滿足に振れないわ、出るわよ」
「やだ、寒い」
　何故か屬さんがちよつとゴネる。あ、さうか、煙草吸ひそこねたんだ。
「つべこべ云はないの、行くわよ。さあ、ギャル人間、あたしの爲にドアを開けなさい」

「はーい」
猫はルチルの膝からぴよんと飛び降り、ドアに驅け寄ると、ぺたりと手を當てた。
「面倒だから一般人となるべく鉢合はせたくないわ。人が居ない方向に行くわよ」
「さうだな。人が居ない方向は判るのか？」
「宇宙興産の敷地の中ならちやんと頭に地圖があるわ。あたしが先に走るから、貴方達は頑張つてついてきなさい」
「うへえ、なんて宇宙人ヂャ」

――――

一應毎日三十分程度はランニングしてゐるとはいへ、荷物を持つて走るのは流石にちよつと辛い。
ビーナス・ドームの裏手邊りまで走つてきた所で、猫が足をとめた。誰か居る。
「見つけたよ、メンヘラン星人の終はりの形」
「チッ」
宇宙人だ。今まで見たことのない、不思議な宇宙人が目の前にゐる。
銀色の胸まである長い髪。能面の様な、整つてゐるが特徴も表情も無い顔。グレーのワークシャツの下にはもう一枚、無地のTシャツらしきものを著てゐる。激しく色落ちしたデニムに、くたびれたスニーカー。
なにより特徴的なのが、髪と肌全體が、淡く白く發光してゐるのだ。
「わー、光つてる」
ルチルが驚きに滿ちた聲で呟く。これが夜なら、更に目立つ事だらう。
「タンタラン星人、あたしは地球と故郷以外の何處の星に行くのも好かないけれども、退屈なあんたの星の奴に捕まるのだけはごめんだわ」
「隨分だね。君の安樂の地が僕らの故郷である事を光榮に思へよ、メンヘラン星人」
私は猫の前に立つ様に歩を進める。ルチルも驅け寄つてきて、猫を持ち上げてだつこする。
「ありがたう。この方が話すときに見下されなくてすむわ。貴方はいい子ね」
「いやあ、へへへ」
「初めまして。貴方はタンタラン星からいらしたのですね。一體、何が目的なんですか」
「ああ、初めまして、レディ、そんな怖い顔をしないでくれ。まづは名乘らなければね。僕はタータ・ランタネイン。タンタラン星に文化や知識をもたらす爲に、様々な宇宙人の『終はりの形』を蒐集（しうしふ）する仕事をしてゐるんだ」

「それで、このメンヘラン星人を『回收』する、といふことですか？」
「さうだね。僕としては出來るだけ穩便にその猫を連れて歸りたいんだけどなァ」
タータはさう云ひながら、大袈裟に腕を廣げた。
「あたしはあんたについて行くなんて厭よ。餘生は地球でおもしろをかしく觀光でもしながら暮らすわ」
「ねこちやんが厭ならウチも反對ッス」
ああ、たうとうルチルがメンヘラン星人の味方になつてしまつた。

「式谷鋼、あたしに力を貸しなさい」
「え、俺？」
唐突に呼びかけられて、兄が吃驚した聲で應へる。
「式谷鋼が貴方以外に誰が居るのよ、馬鹿ね。式谷は式谷でも式谷瑠璃は見えるだけでせう、全く」
あ、さり氣なく酷い。でも「式谷の女」呼ばはりでなくなつた事は進歩かもしれない。あと、見えるだけ、なのは本當なので、反論できない。
「でも俺どうすればいいの」
「刀をこちらに寄越しなさい」
「えーと」兄は腰にきつちりと刀を結んだ紐を解いて、「はい」と云つて、刀の鞘を持つて猫のはうに突き出した。
「それぢや觸れないぢやない、もつと近寄りなさい、このへつぽこ！」
酷い云はれ様である。
「はいはいねこちやんこつちッスねー」
ルチルも兄に近寄ると、ちやうど刀の鞘に猫の手がちよいと觸れる。
「あたしに名前をつけなさい、式谷鋼！　早く！」
「え、あつ、ぢやあ、タマ！　タマにする！」
「タマかァ……」
我が兄ながら、センスのなさに思はず言葉が漏れてしまふ。タマとは、式谷家代々の猫の名前である。ていふか、猫は全部タマだ。ヲスもメスもなく平等にタマである。
「玉――翡翠（ひすい）の事ね。惡くないわ。いいわ、貴方を承認します、式谷鋼」
するりとルチルの腕から拔けた猫――今まさにタマと云ふ名前になつたのだが――タマは紅く光る猫になつて、刀にまとはりつき、薄綠色だつた下緒（さげを）を見事に紅く染めて、そのまま消えた。
「……何してるの。刀を拔きなさい、式谷鋼」
すつかり刀が喋る形になつてしまつて居る。兄は鞘を持つた左手を腰に當てて、すらりと刀を拔いた。
「おお……」
先程のちやちな風合ひから一變して、ルビーの様に眞つ赤な

刀身。隨分禍々(まがまが)しい日本刀になつた。
「恐ろしいけど綺麗な刀だ……ただのナマクラが魂を持つとかうなるのか……」
さう呟きながら、兄はタータに向かつて、中段に日本刀を構へた。

「あら、武器構へられちやつた。困つたな。ぢやあ、ちよつと痛い目を見て貰はうかな、勿論、メンヘラン星人はその刀ごと頂いていくからね」
兩手の手の甲邊りが裂ける様にばくりと開いて、そこから長めの刃物が生えてきた。カマキリみたいで怖い。
「式谷鋼以外は下がりなさい。はつきり云つて邪魔になるから」
さう云はれると後退するしかない。私達は少し後ろに下がり、逆に、兄は二歩程前へと進む。
「はあッ」
最初に仕掛けてきたのはタータの方だつた。刃物が眞つ直ぐ兄に襲ひかかる！

「くそッ、變な刃物怖ェ」
兄は刀を八相(はつさう)に構へ、ギリギリでタータの刃物の先を躱(かは)したその姿勢で一氣に刀を振りぬく。
刀の切つ先は外れたものの——

「うッ」
タータの著てゐたシャツが袈裟斬(けさぎ)りされたかの様に大きく裂けた。裂け目から微かに光が漏れる。
「すげえ、これがメンヘラン星人の力か」
「まだまだ。一割も出せてないわ。でも、用意が不十分なこいつを追ひ拂ふ事くらゐは出來るかもしれないわね」

「くそッ、まだまだ！」
タータは再び體勢を立て直し、刃物を手の甲から更に引き伸ばして攻撃しようとする。兄は後ろに飛び退かうとするが、間に合はない！

が。

ペチンッ

變な音がした。振り向くと、屬さんがサイレンサー付きの銃を構へてゐた。
「あー、良かつた、ちやんと當たつた」
ふう、と屬さんが息を吐く。
「う、ぐぐ、いたた……」
タータの肩口が眞つ黑に染まつてゐる。

「あーあ、多勢に無勢になるとは思はなかつたなあ……怪我もしちやつたし、出直すよ。でも、次に會ふ時は戰爭だからね、覺悟するんだよ」
タータはパタパタと刃物を折りたたんで手首に仕舞ひ、元來た道を走つて行つて、そのまま姿を消した。

「追はなくていいんですか」
「正直、あたしたちも準備不足よ。何の許可もなく殺すと貴方達が捕まるし、刀の承認も初めてだつたし」
兄が日本刀を鞘にしまふと、鐺(こじり)の邊りから漏れ出る樣にしてタマが現れた。
「ああ、ハラハラしたわ。式谷鋼、貴方、帶刀してた癖に隨分賴りないのね。仕方ないからこれからもりもり特訓するわよ。あたしは貴方の側で實踐的な戰ひ方を敎へるわ」
「えー、マジかよ……ていふか、なんにせよ、一度東京に戻らないとな、コレ」
「ねこちやん行つちやふの……」
ルチルが酷くがつかりした樣子で呟くと、タマがルチルの足元にするりと擦り寄る。
「ええ。しばらくお別れだわね。貴方には見つけて貰つたし、助けて貰つたから感謝してゐるわ。大丈夫、また逢へるわよ。式谷鋼、この子にあたしくらゐかはいーいねこのぬひぐるみを送りなさい。わかつた？」

「さうだな。瑠璃、家にぬひぐるみを送るから彼女に渡してくれないか？　俺、これから越智君と合流して、急いで荷物引拂つて東京に歸る事にするから」
「分かりました。ルチル、猫の種類で何かリクエストはある？」
「うーん、もふもふで、白い子！　出來るだけねこちやんに似てるのがいいなァ」
ルチルはしやがんでタマの頭から尻尾にかけてしゆるりと撫でた。
「またね、ねこちやん」
「勿論よ。約束するわ、かはいいお孃ちやん。さ、そのヲチとやらに、このあたしを紹介なさい。これから長い付合ひになるわよ。あと、無闇に歩きたくないからあたしを常にだつこなさいね」
「はいはい……あ、ちよつと、袴に爪立てないで」
タマが勝手によぢよぢと兄の上に登らうとするので、兄は慌ててタマを抱へた。
「さ、行くわよ」
「ぢやあ、俺はこれで失禮します。瑠璃、ひいぢいちやんに宜しくな」
「分かりました。職場の先輩をいきなり斬りつけようとしたつて傳へますね」
わざと意地惡く云つてみる。あの時肝を冷やした仕返しであ

る。
「うわあ、やめてよ瑠璃、ちやんと順序立てて説明してよ？」
「わかつてますつて」
「ヂャあ、お氣をつけて」
「瑠璃さんのお兄さん、ねこちやんを宜しくお願ひするッス」
「分かつたよ」

かうして、兄の襲撃と、ドーム裏での戰鬪は終はつた。
本當になにもかも突然過ぎて、私達はすつかりくたびれてしまつた。
「えーと、ルチルさん、兄がいきなり斬りつけたり猫持つて行つたりで非常識で本當にごめんなさい」
「良いんスよ、どちらも理由がちやんとあつたんスから。まあ、正直お兄さんを好きにはなれないと思ふッスけどね」
「それでいいです」
むしろ、これで私が嫌はれても仕方がない事例だ。もうルチルに頭は一生上がらないだらう。
「どつと疲れたの……グラウンドに坐つて業界ウォッチショーでも觀るか。ビール奢るから」
「それが良いッスね。まつたりしませう」
「うし、行くか」

此處からは餘談だが、始まつたばかりの業界ウォッチショーを見ながらビールを飲んでゐたら、越智さんからメールが入つた。

〝今回の事、鋼さんからお聞きしました。お祭りの後、特にご豫定が無ければ宇宙驛の近くの1つ星和食レストランの豫約を致しますので、是非ディナーを樂しんでください。その後はホテルへの宿泊かリムジンを手配します。勿論全ての料金は鋼さんもちです。〟

「……だつてさ。どうする？」
「行く！　わあー、樂しみ！　宇宙市の地酒つて何があるのかなー」
ルチルの顔がぱあ、と明るくなる。
「宇宙市近郊なら有名なのは『極東美人』邊りかの」
「サッカン地酒詳しいッスね」
「なら越智さんに賴んでレストランに地酒を色々用意して貰ひませうか」
「お、いいね」
ショーの後で常設の宇宙興產歷史博物館を巡り、その後レストランで食事をして——今回は、飲まれなかつた。頑張つた。
結局ホテルで一泊して、ここぞとばかりにかなりお金を使つてやつた。

この時私達は氣が附いてゐなかつた。

タンタラン星人とのやりとりを見てゐた、もう一人のメンヘラン星人がゐた事を。

「パイロープ……自分は貴方を許さないわ。ユークレースは自分のものになる筈だつたのに」

その暗い呟きは、誰にも傳はる事もなく、空氣の中に溶けて消えた。

――――

【一月末、宇宙安全・治安對策協力室　三階、室長室前】

「やべー、越智君に起こされなかつたら今日普通に遲刻してたわ、まさか今日雨とは思はんかつたしバスは混んでるし」

白い猫をマントの下に抱へた男――式谷鋼が、宇宙安全・治安對策協力室の廊下を早足で歩いてゐた。

「雨の降る朝は眠いのだわ。行動するのは常に夜にしなさい」

「さういふ訣にはいかないよ。呼ばれたんだから時間通りに行かないと」

（なんだか、久しぶりに室長室に呼ばれた氣がする）

室長室の扉の前で、輕く深呼吸をして、和服の衿を正し、タマを抱へ直す。腰に帶びた日本刀の鐺が僅かに搖れた。

「失禮します」

「どうぞ」

鋼は執務室の重い扉を開く。部屋の中にはデスクと三人がけの黑いソファが二臺、大きなガラスのテーブルがある。一枚板のデスクの上には、安價なノートパソコンと、黑い地球儀が乘つてゐた。

姿勢よくハイバックチェアに坐つた、黑いマオカラースーツの男が、キーボードを叩く手をとめた。

「おはやうございます、それから、お久しぶりです、平澤閣下」

「ああ、ご機嫌よう。先日報告書を見せて貰つたよ。あの時はご苦勞だつたね、式谷君――と、キミの猫、タマさんだつたかな」

さう云ひながら平澤が椅子から立ち上がる。

「初めまして。式谷鋼の上司の平澤つてのは貴方ね？」

「タマ！　平澤さんだろ！　ちやんとさん付けて話せよ！」

「はは、元々宇宙人なんだから文化が違ふんだらう、それに、日本語を喋る猫に呼び捨てされるのは貴重な體驗だ」

「あら、流石ね。良くわかつてゐるぢやない。メンヘラン星人の文化には敬語も敬稱もないわ」

「あの日、平澤閣下も宇宙興產にいらして、しかもライブをされてゐたと、祭りの後でお聞きしました。存じ上げなかつたご

無禮申し訣ありませんでした」
「別に構はないよ。知らせてないんだから。ああ、突然呼び出したのは他でもない、キミの猫、タマさんの事だ。今日の朝、こんな脅迫狀がきたんだよ」
平澤はチャック付きナイロン袋に入つた、三つ折の折り目がついたA4の紙を鋼に渡した。
「拜見します——と、片手で失禮します」
鋼はナイロン袋の中の文字を目で追つた。
「ちよつと、見せなさいよ」
タマがぐい、と袋の端を手で引き寄せる。

『メンヘラン星人（固有名：タマ）を寄越さなければ衞生ネットワークの水に毒を入れる』

ワープロソフトとプリンタを使つて作られたらしいものが、たつた一文書かれてゐた。
「これは一體」
「キミが報告書で書いてゐた、例のタンタラン星人の犯行聲明文だよ。キミも知つてゐるだらうけれども、衞生ネットワークは月と繫がる重要なライフラインだ。これはいはば、地球と月への挑戰狀である」
「大變だ」
「あたしはタンタラン星なんて厭よォ。本當になーんにもない所で、只管（ひたすら）あたしの知識を吐き出すだけの作業させられるのだわー。そんな退屈過ぎる餘生なんてごめんだわよ」
「テロリストに屈する事は絶對に出來ないし、有害でなくなつたメンヘラン星人のタマさんは今や私達の保護の對象となつてしまつてゐる。衞生ネットワークとタマさん。私達は兩方守らなければならない」

「俺は——守れるでせうか」
「俺は、ではないよ、私達がなんとしても守るんだ。これはテロリストとの戰ひだからね」
「さうですね……」

鋼の大きな不安を表す樣に、窓の外では雨が本降りになつて來た。
「タマ、力を貸してくれ、な」
タマの頭をそつと撫でて、鋼は呟いた。
「當然だわ。さつさと強くなりなさい、あんなヘボい腕ぢや刀が泣くわよ」

その言葉が、何故か、無根據に勝算を見せてくれるやうな氣がして、鋼は、少しだけ笑つた。